

県版「学力テスト」か？

県教委がすすめる「みえスタディ・チェック」

16日の市議会一般質問で、私は「土曜日授業」や「みえスタディ・チェック」の教育問題を取りあげました。「みえスタディ・チェック」とは、三重県教委が今年から行なおうとしている「学力テスト」の名称です。対象となるのは、小学校1年から中学校3年までの全学年の児童生徒、科目は国語、算数・数学、理科を、学期ごとに年2回から3回行なう、そしてその結果の集計データは県教委に集める、という内容です。

テスト問題は県教委が作成しますが、メール送信で印刷などの作業は各学校が行ない、採点と結果の集計や入力なども、すべて学校が行なう、とのこと。今でも忙しい学校の教職員に、新たな仕事を上乘せすることになります。県は7月4日には、第1回目を「試行」という急ぎぶりです。これほど急いで、学校現場への負担をふやしてテストを行なおうという目的は何でしょうか？

「全国学力テスト」の順位アップが目的か？

三重県は「全国学力テスト」の成績が、全国の中で下位であるということが問題にされています。鈴木知事は「学力テストで全国3位以内に入る」という目標をかかげて、教育現場を叱咤しています。今回の県版「学力テスト」は、そのために急いで具体化されたものと思われます。

県下の学校がいっせいに統一問題でテストを行ない、そのデータを県教委に集中すれば、順位やランクを付けることも可能になります。小6と中3だけの全国テストに加えて、全学年に学期ごとに行なう県テストによって、県下の学校が日常的に競争に追い立てられはしないか？疑問がつのります。

市教委は、学校現場や市の負担、子どもの負担や評価方法など、テストの実施には問題が多いとしていますが、参加しないと答えませんでした。

新名神のトンネル工事現場を見学

22日午前、小岐須町で工事中の「新名神・野登（ののぼり）トンネル」の見学会（鈴峰公民館主催）に、孫を連れて参加しました。

このトンネルは鈴鹿市から亀山市のジャンクションまでを結び、長さ4キロ、2車線を上り下りの2本掘り進めています。断面積は26畳ほどのことです。トンネルから出る土は道路の盛土に利用しています。トンネルの出口からは御幣川を越えてしばらく橋梁が続きます。



上り線トンネル出口前で記念撮影

現在、鈴鹿側は780メートル進んでいて、見学は入口から100メートルほどまででした。壁面から天井までを



トンネル内部・コンクリート打ちの準備中

一体に、鉄筋を組んでコンクリートを順次打っていく作業が進められています。トンネルと道路が開通（亀山～四日市）する予定は、4年半後です。

工事現場を直に見られるめったとなない機会なので、多くの地元住民が参加しました。ネクスコ中日本と大林組の担当者が、親切に説明してくれました。

参加者の皆さんは、国家プロジェクトの大工事の現場の様子に、「ヘー」と目を丸くしていました。生活道路の国道306号バイパス工事は、20年経っても半分しか開通していませんが、「新名神の方が先に出来てしまうなあ」などと話しながら、現場を歩きました。



御幣川を越える橋の橋脚

落合恵子さんが語る～いのち、いきる、いま～

7月6日(日)13:00より 鈴鹿市民会館にて 参加費 500円
どうぞおいで下さい。チケット希望の方は市議団まで。

通学路の防犯灯、市がLEDで整備

これまで鈴鹿市は、「防犯灯」は各自治会が付けるもの、市は付ける時に補助金を出し、電気代などは自治会負担となっていました。そのために、離れた集落の間の通学路では、なかなか防犯灯が付けられませんでした。

今年度から、児童生徒の安全確保のために、通学路の防犯灯は市が設置することに改善されました。すでに付いている約80灯は自治会から市に移管されます。また、市内で未設置の通学路についても、約1100灯（市教委調べ）をLED型の防犯灯で設置することになりました。

環境省の補助も活用、本年度いっきに設置の予定

市環境部は本年度、「LED街路灯等導入事業プロポーザル」という事業に取り組んでいます。

市が管理している照明灯（公園灯200、地下道照明灯200、公共施設照明灯650、通学路防犯灯・既設100、新設1100）をまとめてLED化する事業として、民間事業者からの提案を募集・選定し、選定された業者が市と契約、本年度内にLED設置を行なう。

設置したLED照明灯は10年間のリースとする。市はリース料を業者に支払うが、LEDにしたことにより電気料金と維持管理費がグンと安くなるので、財政負担は抑えられる。また、環境省の補助金「地域における街路灯等へのLED照明導入促進事業」（上限1200万円）が活用できる。

この方式にすると、毎年の予算で順次防犯灯を設置するのに10年かかるのを、1年でいっきに設置することができ、しかも1年目から電気料金が半分に減らせる。また設置工事を市内業者が行なうことにより、仕事起こし、経済対策にもなる。

このようにメリットの多い仕組みの事業により、市内の多くの通学路に1年以内にLED防犯灯が設置されることとなります。昨年県内で起こった少女殺人事件のような、暗い夜道での犯罪を防止することが期待されます。

わが家の軒にツバメが到来

わが家の玄関先に初めて、ツバメのカップルが巣をかけました。毎朝楽しみにながめています。



ずいそう



山小屋はありがたい

木村大作監督の映画「春を背負って」は、雄大な立山連峰を舞台にすばらしい大自然と、その中で生きる人間を描いている。5年前の「剣岳・点の記」は明治時代にきびしい高山に挑んだ測量隊の物語だったが、こんどの映画は現代の登山、たくさんの人たちが山を楽しむことを支える「山小屋」のドラマである。

立山連峰で山小屋「堇(すみれ)小屋」を営んできた父親が急逝、都会に出ていた息子がその跡継ぎを決意し、悪戦苦闘しながら小屋主として一人前になっていく。小屋を訪れるいろんな人たちが、父親のことを慕い感謝の言葉をかけていくことで、息子の知らなかった父親の人物像がだんだん見えてくる。カメラマン出身の木村監督が、すべて3千メートルの山の上でフィルム撮影した北アルプスの山々の風景が、すばらしい。

人々が自然と親しむ山旅を支える山小屋

私も年に1～2回、信州方面の登山に行くが、私のような素人でも3千メートル級の頂上に立てるのは、山小屋があるおかげである。着替えや雨具など必要最小限の荷物をついで登っていけば、山小屋には食事も酒もあり、布団で安眠できる。近頃はトイレもきれいになってきたし、場所によっては温泉もある。もし食糧からテントまで全てをついで登れと言われたら、自分の体がいちばんの荷物という事情により、とてもムリである。そんな軟弱な人間が、すばらしい満天の星、夜明けのご来光を拝めるのも、うまいビールが飲めるのも、山小屋あつてのことである。

映画の中でも、多忙な山小屋の仕事、麓からの大量の食糧などの荷上げ、そして負傷者や遭難者の救助などの場面が、何度も出てくる。山小屋の経営は大変である。朝は4時起床、朝食、掃除、布団干し、夕食、片付けと仕事がつづき、9時半にやっと就寝となる。また、経営的には小屋を維持するための売り上げが、年間2千万円以上は必要ということだ。(パンフより)

テレビで「百名山」などの登山の番組を見ていると、また今年も行きたいなど、思いが募ってくる。足腰が何とか動くうちに、山小屋にお世話になりながら、あちこちの山の風景を見に行きたい。